

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程3年	河原清志	印
指導教員	所属・職名	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 特任教授	鳥飼玖美子	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	翻訳の操作性と社会的役割		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	研究代表者 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程3年	河原清志	
研究期間	2011	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は翻訳の実務において、(1) どのような操作を経て訳語や訳文を決定するのか、その言語操作的な側面を、原文テキストと翻訳テキストとを比較対照し、そのシフトを分析する。分析にあたっては、近時展開しつつある認知言語類型論の知見を主に借用しつつ、語／フレーズ／統語／テキスト構成／語用の5つの単位ごとに分析する。次に、(2) 当該翻訳を行った翻訳者にインタビューし、どのような意識で翻訳に臨んでいるか、どのような操作を本人としては行っているのか、訳出に際しての留意点、翻訳のもつ社会的役割や意義・目的などについて、実際の訳出データと分析結果を見せながら、具体的事例に即して聞き出す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[翻訳シフト] [言語操作性] [社会的役割]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の成果は研究報告書である『翻訳の操作性と社会的役割：翻訳とは何か—研究としての翻訳』に盛り込んでいる。「翻訳とは何か (イントロダクション)」「翻訳シフト論」「翻訳の社会的役割」「品詞転換論」「メディア翻訳論」「カセット効果論：無限更新的意味生成の営み」「翻訳学と対照言語学」「文化翻訳論」「翻訳と言語観」「語彙文法論」「コア理論」「字幕翻訳文化論」を内容としている。

また、これ以外にも、講演では「映像の翻訳と政治性」、シンポジウムでは「翻訳コミュニケーションの射程と可能性」、学会発表では「英日翻訳のテキスト分析方法論の諸相」「認知意味論から語彙意味論、語彙文法論、そして通訳翻訳論へ」「焦点連鎖論から見た日本語と英語の対照—日英翻訳テキスト分析」「国際ニュース報道の通訳翻訳の諸形態とその言語的処理」を内容とする発表をそれぞれ行った。

本研究の研究目的を達成するための研究計画・方法は以下のとおりであった。

- (1) 本研究は、まず研究協力者である翻訳者が翻訳した出版翻訳書とその原著を比較対照することから始まる。できるだけ多くの翻訳書とその原著を収集し、分野やテキストタイプに偏りが出ないように、またあまりに特殊な話題に偏らないように、分析すべきテキストを選択する。
- (2) 記述的研究の手法によって、原文と翻訳をパラレルコーパスとして並置し、形式的対応と意味ユニットとの齟齬を緻密に分析し、翻訳シフトを析出する。
- (3) 主に認知言語類型論の枠組み (研究代表者による論文の成果) を援用して、(2) を分析し、翻訳シフトの全体像と個々の傾向を、質的・量的に詳らかにする。
- (4) (3) で明らかになったことを踏まえて、研究協力者にインタビューに行く。そして語りを録音する。
- (5) (4) のデータを書き起こし、書き起こした結果を研究協力者に個人情報観点からチェックして頂く。
- (6) インタビューの書き起こし結果を、メタファー理論とナラティブ理論を適用して分析し、研究協力者が持っている「翻訳」についてのメタファーやナラティブを析出する。
- (7) (3) と (6) の結果を突き合わせながら、翻訳の言語行為性と社会行為性の観点から、「翻訳の操作性と社会的役割」について理論的に考察し、その結果を論文にまとめる。

これは、1. 翻訳の言語操作性の分析、2. 翻訳の社会的役割の分析、の2つを主な内容とするものである。

1. 翻訳の言語操作性の分析

まずは翻訳の言語分析を行うに当たって、主に認知言語学を援用するための理論的根拠を記した。それが「翻訳学と対照言語学」「語彙文法論」「コア理論」である。またこれらはラング・レベルとパロール・レベルを橋渡しする理論として翻訳分析では位置づけられるが、翻訳におけるパロールの意味ないし語用論的解釈の意味として、翻訳における意味の不確定性や解釈の複層性を扱ったものとして「カセット効果論」「翻訳コミュニケーションの射程と可能性」がある。

これらの理論的枠組みを援用して具体的な翻訳の言語操作性を分析したものに、「翻訳シフト論」「品詞転換論」「英日翻訳のテキスト分析方法論の諸相」「焦点連鎖論から見た日本語と英語の対照—日英翻訳テキスト分析」がある。

また本研究では翻訳の言語分析から翻訳の文化性の問題も析出することができた。それが「文化翻訳論」「字幕翻訳文化論」である。

以上、翻訳の言語操作的な側面に関しては、さまざまな翻訳分野に関し、多角的な視点から研究ができた。分野は人文科学・社会科学・小説・エッセイ・ニュース記事・ニュース字幕その他の分野を分析することができた。

2. 翻訳の社会的役割の分析

研究目的を達成するための研究計画・方法に記したインタビューに関しては、本年度はあまり実施することができず、実施が可能となったメディア翻訳の分析に関するものをまとめることができた。それが「メディア翻訳論」「国際ニュース報道の通訳翻訳の諸形態とその言語的処理」である。

また研究目的を達成するための研究計画・方法に記したように、本研究は翻訳者が「翻訳」について (無意識的に) 持っているメタファーやナラティブを析出することも目的のひとつとしているが、その前提として翻訳理論の先行研究から読み取れる翻訳メタファー論、翻訳者ナラティブ論を分析したものに「翻訳とは何か (イントロダクション)」「翻訳の社会的役割」がある。「翻訳と言語観」はその前提となる翻訳における言語観を記したものである。

最後に、上記 1. と 2. を架橋して翻訳の言語分析から見えてくる翻訳の政治性の問題を扱ったものに「映像の翻訳と政治性」がある。

研究成果の概要 つづき

以下では、上記研究内容の主要なものの要旨を掲載する。

- ・「英日翻訳のテキスト分析方法論の諸相」：本発表は、英語から日本語への翻訳テキストの分析方法を分析するメタ理論の研究を目的とする。翻訳に当たって翻訳者は、翻訳における①言語的等価及び②社会的等価を実現するために、①起点言語と目標言語の統語構造や意味構造、情報・テキスト構造、文体構造、(言語に現れる)社会文化構造などの違いを踏まえた上で(言語構造論)、②翻訳の諸目的や社会的役割・機能に応じて起点言語を目標言語に「転換」し、かつ「介入」する操作を翻訳実践行為として行っている(翻訳実践論)と想定される(代表的な先行研究として、Vinay and Darbelnet 1958/1995、Catford 1965/2000、Toury 1995、Chesterman 1997、Munday 2007、Baker 2011 など)。この①「転換」という言語的実践行為と、②「介入」という社会的実践行為がどのような言語項目についてどの程度現象しているのか、そして翻訳におけるテキスト(言語的側面)とコンテキスト(社会文化的側面)がいかに連関するのかについて、翻訳物の言表に現れる翻訳シフトを緻密に論じることで分析した。そしてこのような分析を通して、翻訳研究におけるテキスト分析の様々な方法の有効性を検証した。本発表での翻訳テキストの分析対象は出版翻訳とメディア翻訳の分野である。
- ・「焦点連鎖論から見た日本語と英語の対照—日英翻訳テキスト分析」：本発表は認知言語学の焦点連鎖論から、日英翻訳テキストを分析対象にして、日英語間で内的世界を言語化する際の事態構成の順番の違いを分析することを目的とする。対象把握(言及)と内容把握(述定)のあり方は言語によって異なる。一般に日本語は題目として参照点を立て、標的を後続させるという順で事態構成し、英語はトラジェクターを主語として立て、述語とランドマークを後続させるという事態構成順を採る。この情報配列順が顕著に対照的なのが日本語の原文とその英訳テキストである。具体例を挙げてみよう。【原文】米国のサブプライム問題や石油価格の記録的高騰等を背景に、世界経済の下方リスクが高まっています。【翻訳】The risk of the global economy taking a downward turn is increasing against the backdrop of the sub-prime mortgage loan problem in the United States and the surge of petroleum prices to record levels, among other issues. 【分析】日本語では「米国サブプライム問題や石油価格の記録的高騰等を背景に」という情報が参照点になり、それを足がかりに標的である「世界経済の下方リスクが」という主語すなわち言及対象が提示され、「高まっています」と述定されるという視点の推移で情報が流れている。文法関係では「①斜格→②主格→③述語」の流れであり、焦点連鎖では「①参照点→②標的→③述定」の流れである。他方、英語では、The risk of the global economy taking a downward turn is increasing という情報が先行している。つまり、まずトラジェクターが主語として提示され、次いで述語(動詞)によって述定されている。そのあとランドマークとして斜格 against the backdrop [...] and the surge [...]が続いている。これは文法関係では「②主語→③述語→①斜格」の流れ、焦点連鎖では「②trajector→③述語→①landmark」の流れと言える。視点が外界に内在する認知モードを取る日本語では、まずその視点から見て参照点となる対象を認知し言語化する。そして、焦点を次の参照点へ移し、さらに次の参照点に移して標的に達してから述定するという構図があるのに対し、英語は視点が外界から外置されているため、際立ち度の高いトラジェクターを主語に立て、述定したあとで、際立ち度の低いランドマークを提示してゆく、という構図を取ることがこの例からもわかる。このことを豊富な事例をもとに更に検討した。
- ・「字幕翻訳における文化的要素の翻訳ストラテジー」：英語ニュースの日本語への字幕翻訳および日本語ドキュメンタリーフィルムの英語への字幕翻訳において採用されている文化的要素の翻訳ストラテジーを実際の翻訳データから抽出・分析し、その背後にある理由・動機を分析した。具体的には言語テキスト(原文と翻訳物)を比較対照し、語レベル・フレーズレベル、文法レベル、テキストレベル(主題進行・結束性)、語用論レベルに分類し翻訳シフトを析出した。またこのシフトを、①言語的側面、②コミュニケーション的側面、③社会・文化的側面に分類し、訳出ストラテジーを命題保持訳、削除、圧縮、補足、の4つに大きく分類して文化的要素を析出した。
- ・「翻訳コミュニケーションの射程と可能性」：通常、翻訳とはある言語で書かれたテキストを別の言語のテキストに変換する言語行為(言語間翻訳)を指すが、「翻訳」という言葉は「メタファー(喩)」として使用され、実に多義的な概念でもある。例えば、社会文化現象を言語で説明/解釈する「文化の翻訳」、異領域間の思想や技術の転移である異領域間翻訳などである。故・山岡洋氏は「翻訳とは学びである」と唱えた。これは我々の社会文化的営みの根幹に位置する解釈/媒介/転移行為を「翻訳」として捉えるものと再解釈できる。そこで本発表では、翻訳を①外国語そのものの学びである(広義の)言語実践の営為と、②思想・文化の学びであるメタ語用実践の営為として捉え、「英語メディア」の複層的解釈行為としての翻訳という概念を提示した。そのうえで、国際文化学の観点からグローバル社会における翻訳コミュニケーションの「学び」や社会的意義を論じた。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

【論文】

河原清志 (2011). 「翻訳語のカセット効果論：無限更新的意味生成の営み」青山学院大学英文学会 (編) 『青山学院大学英文学思潮』第84巻, (pp. 69-88) (単著).

河原清志 (2012). 「翻訳シフト論の新展開への試論」『麗澤大学学際ジャーナル』第20巻第1号, (pp. 71-80) (単著).

③

【講演】

河原清志 「最新の通訳・翻訳理論研究の動向について」大東文化大学大学院経済学研究科通訳論専攻コース、2011年7月8日、大東文化大学.

河原清志 「映像の翻訳と政治性」津田塾大学メディアスタディーズ・コース、2011年10月27日、津田塾大学.

【シンポジウム】

河原清志 「翻訳コミュニケーションの射程と可能性」山岡洋一さん追悼シンポジウム：関西通訳翻訳理論および教授法研究会第14回例会・日本メディア英語学会西日本地区研究例会合同開催、2011年12月11日、関西大学.

④

【学会発表】

河原清志 (2011). 「字幕翻訳における文化的要素の翻訳ストラテジー」日本国際文化学会第10記念全国大会 (沖縄、名桜大学) (口頭・単独).

河原清志 (2011). 「英日翻訳のテキスト分析方法論の諸相」日本通訳翻訳学会第12回年次大会 (神戸大学) (ポスター・単独).

河原清志 (2011). 「認知意味論から語彙意味論、語彙文法論、そして通訳翻訳論へ」関西通訳翻訳理論および教授法研究会第14回例会 (西宮市大学交流センター) (口頭・単独).

河原清志 (2011). 「焦点連鎖論から見た日本語と英語の対照—日英翻訳テキスト分析」対照言語学若手の会シンポジウム—日本語から見た外国語— (麗澤大学) (口頭・単独).

河原清志 (2012). 「国際ニュース報道の通訳翻訳の諸形態とその言語的処理」日本メディア英語学会東日本地区第83回研究例会 (早稲田大学) (口頭・単独).

【研究報告書】

河原清志 (2012). 「翻訳の操作性と社会的役割：翻訳とは何か—研究としての翻訳」(全12回).

(以上、本研究に直接関係するもののみ掲載。間接的に関係する通訳研究や言語理論研究の発表は省略。)